

# アナイス・ニンの世界

木村 淳子

## I

アナイス・ニンが、1964年に、デンヴァーで出版した作品に、『コラージュ (Collages)』と題された小品集がある。19のきわめて短かいセクションから成っており、個々のセクションで語られるエピソードは、短篇と呼ぶこともできぬほど短かいものである。または、これらが互いに緊密な関係を結びあって、より大きな、一つのまとまりを作っているのでもなさそうである。その題名が示すとおり、心の中に浮んできた、さまざまの形と色の想念、あるいは夢、とでもいったものの断片を、貼り合わせ、切りばめて、つまり「コラージュ」してでき上がった作品であるということができよう。アナイス・ニン自身は、そのエッセイ集『未来の小説』の中で、この作品について次のように述べている。

In writing "Collages" I allowed myself to live out a mood and see what it would construct. Once the mood is accepted, the mood makes the selection, the mood will give fragments a unity, the mood will be the catalyzer. And so this book, which should have been a novel or another book of short stories, became something else, a collage.<sup>(1)</sup>

アナイス・ニンがいうような、一つの気分を保ちつづけることは、なかなかむずかしいことである。作者がこの気分に入り切るときには、その筆の先からは、彼女の感性そのものがほとぼしり出るかのようである。対象

ほかの女の感覚を刺激して、筆の先からは、アナイス・ニンのむき出しのままの感性があふれだす。読者は文章の流れに押し流されて、アナイス・ニンの内なる世界の中に、知らずに運ばれてしまう。

Vienna was the city of statues. They were as numerous as the people who walked the street. They stood on the top of the highest towers, lay down on stone tombs, sat on horseback, kneeled, prayed, fought animals and wars, danced, drank wine and read books made of stone. They adorned cornices like the figure heads of old ships. They stood in the heart of fountains glistening with water as if they had just been born. They sat under the trees in the parks summer and winter. Some wore costumes of other periods, and some no clothes at all. Men, women, prophets, angels, saints and soldiers, preserved for Vienna an illusion of eternity. <sup>(2)</sup>

これは“*Collages*”の冒頭であるが、この文章の淀みのなさは、どうであろう。あるいは、

Renate's eyes were sea green and tumultuous like a reduction of the sea itself. When they seemed about to overflow with emotion, her laughter would flutter like wind chimes and form a crystal bowl to contain the turquoise waters as if in an aquarium, and then her eyes became scenes of Venice, canals of reflections, gondolas. Her long black hair was swept away from her face into a knot at the top of her head, then fell over her shoulder. <sup>(3)</sup>

という、女主人公レナーテの描写には、臆するところなく己れを露わにしているアナイス・ニン自身を、あるいは生々しい感性のほとぼしりを見る思いがする。そして、ときには、そのぬめぬめとした感覚の横溢にとまどい、僻易してしまう。

若い女流画家レナーテの、ヨーロッパ・アメリカをかけた奇妙な旅と、その旅の途中でめぐりあう人々についてのエピソードから成り立っている物語であるが、その中で、一つの気分を、同じ濃さを保って持続するのは容易なことではないようである。アナイス・ニンがいうように、「この作品を書きながら、一つの気分を保ちつづけること」に成功したか否かは別として、彼女が、その努力をつづけたことだけは確かである。したがって、この作品は、19の奇妙なエピソードをつなぎ合わせた「コラージュ」の作品であると同時に、作者の持っている、ある気分の濃淡のコラージュである、ともいうことができそうである。

With small pieces of cotton and silks, scissors and glue and a dash of paint, he dressed his women in irradiations; his colors breathed like flesh and the fine spun lines pulsated like nerves. <sup>(4)</sup>

“Collages” の中のエピソードの一つに登場する画家のヴァルダは、世界中の由緒深い裂地を使って、女たちや、女たちを取りまく風景をコラージュする。

In his landscapes of joy, women became staminated flower, and flowers women. They were as fragrant as if he had painted them with thyme, saffron and curry. They were translucent and airy, carrying their Arabian Night's cities like nebulous scarves around their lucite necks. <sup>(5)</sup>

ヴァルダの創り出す女たちが、すきとおっていて、空気のように軽やかであるのと同じように、アナイス・ニンが“Collages”の中で描き出す人物は、どのひとりも、まるで夢の中の人間たちのように現実感を伴わない。女主人公のレナーテ。彼女は肩まで流れる豊かな髪と、トルコ石のような碧い目を持った、細っそりとした少女なのだが、その彼女に現身の人間を感じることはできない。ウィンの街角に立っているという、マーキュリーの像に似た顔つきの青年ブルースの中に、現実の青年像を想い描くこともできない。季節ごとに、その季節をあらわす柄ゆきの着物を着る日本娘ノブコもまた、すきとおっていて、風鈴のような声を立てて笑う女たちのひとりなのだ。すべての登場人物が、まるでうすい紗幕を通して見るように、漠として、手に触れることのできない存在である。そして、それらの人物たちは、それぞれが孤独の影を負って動いているのである。

レナーテがカリフォルニアの海岸で会った老人は、人間の社会を離れて、アザラシたちと暮らし、やがて、アザラシたちに見守られながら死んでゆく。自分の家のやわらかなベッドは、岩の上のかたい寝床ほど安全ではなかった。死期の近づいたことを悟った老人は、自らアザラシの棲家へもどるのである。あるいはロサンゼルスからやってきた自動車狂の青年、かれにとっては自動車が最上至高のものなのだ。ときには自分の生命をすら犠牲にすることもいとわない。これらの人物たちは、明らかに現代の疎外された孤独な人間を象徴しているであろう。と同時に、疎外し、疎外されることが、決して重大・深刻な問題ではなくなってしまっていて、ごく当たり前の、日常茶飯事としてしか考えられなくなってしまっている現代人や、現代の世相に対する諷刺であり、警告であるとも考えられそうである。“Collages”の終わり近くに登場するのは、ジュディス・サンズという女流作家である。厭世家のこの女流作家は、ニューヨークのヴィレッジで、人目を避けた隠遁生活を送っていて、人前に姿をあらわすことも、人に会うこともしないのだが、ある日、イスラエルからやってきたというドクター・マンと称す

る男の熱心な説得に、ようやくその孤独の城から姿を現わす。彼女はドクター・マンに向かって次のようにいう。

……;but I am sure of one thing, that human beings can reach such desperate solitude that they may cross a boundary beyond which words cannot serve, and at such moments there is nothing left for them but to bark.<sup>(6)</sup>

“Collages”の中に登場する、すべての奇妙な人物の孤独を、これらの言葉はよく代弁し集約しているのである。そして、

“Solitude,” said Doctor Mann, “is like Spanish Moss which finally suffocates the tree it hangs on.”<sup>(7)</sup>

という、ドクター・マンの言葉は、そうした人間たちに対する作者自身の哀憐の情の披瀝であるのかもしれない。

やがて自滅の淵から立ち上ったジュディス・サンズは、彼女のアパートに人々を案内し、書きためてあった小説の原稿を読ませる。それは次のように始まっていた。

Vienna was the city of statues. They were as numerous as the people who walked the street……<sup>(8)</sup>

“Collages”の中で、アナイス・ニンが試みているのは、夢の世界、虚像の世界を創り出すことである。このことは作品の構成上からも容易になぜけるところである。そこで私たちが考えるのは、なぜアナイス・ニンは夢の世界を創り出したのであろうかということである。

## II

“Proceed from the dream outward.”<sup>(9)</sup>

人間の真実の姿は、目に見えぬ部分、つまり、心理的な内面の世界の中にかくされている、とアナイス・ニンが信じるようになったのは、彼女が精神分析をはじめとする心理学的な研究に興味をおぼえるようになる、かなり以前からであった。その不幸な少女時代以来、こうした素地はすでに彼女のうちに萌していた。少女らしい憧れた根ざした——とはいいいながら、その憧れは、同年配のどの少女のそれよりも強く、切実なものであったのだが——現実の向う側にあるはずのすばらしいなにか、つまり「真実」を求めようとしていた自分自身を説明して、アナイス・ニンは次のようにいっている。

At one time I was very concerned with my faithfulness to the truth. I thought it might be due to up-rootings in childhood, loss of country and roots and father, and that I was trying to create relationships based on a true understanding of the other person, in the diary as well as in life and in the novels, too.<sup>(10)</sup>

若いアナイスの執拗に真実を求めようとする心は、ついにはかの女自身を現実の世界との板ばさみの状態においてしまう。そこで、アナイスは日記の中に自分だけの部屋、自分だけの世界を作り上げ、その中に沈潜していった。彼女は日記の中でだけ、自由な生をたのしみ、彼女にとって真実と思われる生を享受したのである。そして、真実は決して、外界に求められるものではなく、目に見えぬ内面の世界にのみ求められるものであるという考えに憑かれてしまったときに、日記は、彼女の魂を、外にある、より広い世界に向かって飛翔させるためのスプリング・ボードとはならず

に、かえって、彼女を耽溺させる麻薬となってしまったのであった。この間の、内面での自身との葛藤や、自分の作り上げた世界に沈潜しようとする欲求と、外界復帰への志向の間であがくアナイスの姿は、『アナイス・ニンの日記・第一巻』の中にあきらかである。<sup>(11)</sup>

やがて、アナイスはこの苦しみを乗り越える。かの女自身の努力と、苦悩の中での歩み、そのものが彼女の目を外界に向けさせたのであったが、さらに、大戦の暗雲をはらんでいた当時のヨーロッパの時代的な苦しみが、アナイスにより広い視野を与え、外界にむかわせるのに力を貸したのもあった。時代の波にもまれる、この時期のアナイス・ニンの姿は、『アナイス・ニンの日記・第二巻』にあきらかである。

Every time there is talk of Spain, there is a tornado in me of emotion and desire to participate.<sup>(12)</sup>

スペインは父の国である。そのスペインに対する限りない愛惜の念、フランスの、ヨーロッパの、すべての自由を志向する人々への共感を、ニンは日記の中に披瀝している。と同時に、無力な自分自身に対するジレンマも隠してはいない。1938年3月の日記には次のようなくだりがある。

Hitler marched into Austria. Franco is encircling Barcelona, and France, afraid of war, is not coming to its help.<sup>(13)</sup>

さらに、

When the world becomes monstrous, and commits crimes I cannot prevent, I always react with the assertion that there is a world outside and beyond this one, other worlds, human, creative,

to pit against inhuman and destructive forces.<sup>(14)</sup>

しかしフランスでも戦争が始まったら、銃を取って、妻やアナイスや友人たちを殺して、それから自殺するのだという友人のゴンザロに向かっては、かの女はきっぱりと、“taking a gun and killing us all would not help either Spain or the revolutions.”<sup>(15)</sup> というのである。

弾圧を受けつつあったシュールリアリストたちを弾圧者の手からかばい、その生活を支えねばならない毎日の中で——それは確かに危険な毎日であった。ときには家宅捜索を受けたこともあったようであるし、なによりも、毎日を生きるために、かの女は自分の持ち物を売り払って、お金を作らなければならなかった。——アナイスは、自己の存在意義に確信を抱くようになっていった。

1939年の冬、アナイスは戦乱のヨーロッパを去って、アメリカに渡る。

I could not believe that there could be, anywhere in the world, space and air where the nightmare of war did not exist.<sup>(16)</sup>

悪夢のような戦乱のヨーロッパには、飢えと破壊と、寒さと貧困と、家族や親しい人々との離別があった。別れは永遠のものとなるかもしれなかった。ポルトガルから、水上飛行機でニューヨークへ渡る。

Dorothy Norman is intellectual but cold as a human being. She lives by a rigid pattern. She shocked me deeply by saying: “Europe is decadent. You must be happy to be in a healthy country.”

“What you call decadent,” I said, “is the courage to experience all of life.”<sup>(17)</sup>



“rigid pattern”によって暮しているアメリカ人の生活を見たときに、彼女は、自分の来し方をふり返って、いっそう、その人生に対する自信を深めたことであつたらう。そして、飢えも寒さも生命をおびやかす戦争の恐怖をも知らずに<sup>(18)</sup>、それゆえに、“rigid pattern”を守ることを以外のことは考えられもせずに暮しているアメリカ人の、いわゆる「健康な生活」に戸惑いと、虚ろさと、幾分かの軽蔑の念をすら感じたのであつた。「人生のすべてを経験しようとする勇氣」とは、自己を取りまく外界に起こる、すべてのことに直面しようとする態度であると同時に、自己の内面の深部に起こり、あらわれるすべてに、真向から向かってゆき、それらを凝視し、それらに対抗する態度をも指している。

二十代の若いアナイスが、激烈な自己との戦いのあとに達した境地は、すでに1936年の4月、ニューヨークで再会したランク博士との対話にもあきらかである。

“You have escaped from the obsession of analogy. I am glad for you.”<sup>(19)</sup>

というランクに対して、

“I am still in conflict with my feminine self. I am afraid to lose my personal, intimate happiness in this drive towards growth and fulfillment.”<sup>(20)</sup>

といいながらも、

“I don't live by analysis any more, but by a flow, a trust in my feelings.”<sup>(21)</sup>

と答えている。そこには、はげしい苦悩のあとに到達することのできたアナイス・ニンの晴朗な内面風景がある。暗い、長いトンネルの向こうにひらけた明るい風景とでもいいうるものであろう。

さて、時代の試練を経て、さまざまな体験を重ねたアナイスは、もっと深く、人間の心理の内側、意識の深層に、興味を持つようになる。

人間の真実の姿は、平常は意識的に、あるいは無意識的に、その内面の世界にのみとどめられていて、外界に表出されることはない。それは人間の個人的な夢の中、夢想・幻想・白昼夢あるいは自発的な、また外的な、さまざまな刺激によってひき起こされる幻覚にのみ現われるものである。それゆえに、人間心理のこのような領域を探查することによって、その人間の持つ心の形態・傾向・ひろがりといったもの、いいかえるなら、内面の真実の姿が求められるのだ、とアナイス・ニンは考える。こうした内面の姿が、たまたま外に表出されることがある。それは危機にさいしてである。このことをニンは、その体験を通して知ったのである。

Because my drive was stated by Jung: proceed from the dream out-ward, I took this as relating dream and life, internal and external worlds, the secrets and persona of the life.<sup>(22)</sup>

ひとりの人間の、外にあらわれたもののすべてを刻明に描写しても、それは決してその人物をリアルに描くことにはならない、とアナイス・ニンはいう。その人物に、そのような行動を取らせたのは、どのような内面の動きによるものであったかを知るこそが、真のリアリティに達するために必要なことなのである。だから、真のリアリティに達するために、私はリアリズムを放棄したのだ、とアナイス・ニンはいうのである。

こうして、アナイス・ニンは夢の世界に入っていった。それは、一見、現実の世界とはなんの関係もないような世界なのではあるが、実は、現実

の人間の世界の様々の動きを支える世界である。アナイス・ニンが、不幸な少女期の体験と、その後につづく、苦悩に充ちた日々の体験から見つけた世界でもある。単なる夢幻の世界でも、超現家の捉えどころのない世界でもなくて、かえって重たい現実の世界の体験を通して達することのできた世界であるということができらるだろう。

したがって、アナイス・ニンは、当世流のLSD、その他の薬品の服用によって体験される、夢幻の世界を信じない。それは一種のまやかしの世界にすぎないのであって、決して現実の生の重みを支える世界ではないからである。

### III

アナイス・ニンの世界は、光線のさまざまな屈折によって作り出される、万華鏡の世界にたとえることもできらるだろう。外界の事象は、アナイス・ニンという一つのフィルターを通ったあとでは、思いもかけぬ屈折をし、思いもかけぬ模様を作りだす。外界の事象は断片となって、デフォルメされて映しだされる。屈折に屈折を重ねて描き出される万華鏡の、模様の重なりあいの間に見えるのは、現実の生そのものであり、その現実を生きている人間の姿であり、アナイスというひとりの女性のひたむきな姿なのである。

万華鏡の中の世界の特徴は、それが女の世界であるというところにある。しかし、それは、決して、あのリチャードソンに源を発するところの、小説の伝統の一つを形成してきた、女の愛と生のロマンスの世界を意味するのではない。もちろん、ニンの作品のほとんどすべてが、女性を主人公とした女の世界を描いている。その世界の中では、女たちはひたすらに、己れの生を生きている。“*Under A Glass Bell*”という短篇集の中の佳篇、“*The Mouse*”や、“*Birth*”には、女の秘やかな世界の一端が描かれている。“*The Mouse*”では、モーパッサンの短篇中の女主人公の一人を思い

浮べずにはいられないような小間使いの姿が、緊密な筆づかいのうちに物語られているし、“*Birth*”では“*The child; said the doctor, is dead.*”<sup>(23)</sup>という書き出しで始められて、child-bearing という難事業の、長い苦痛にみちた時間の経過のうちにある、女の姿を描き出す。

“Push! Push! Push with all your strength!”

I pushed with anger, with despair, with frenzy, with the feeling that I would die pushing, as one exhales the last breath, that I would push out evreything inside of me, and my soul with all the blood around it, and the sinews with my heart inside of them, choked, and that my body itself would open and smoke would rise, and I would feel the ultimate incision of death.<sup>(24)</sup>

この短篇の中に読み取られるのは「私」の苦しみの呻ぎであり、荒い息づかいであり、大きな苦しみのあとの、大きな落胆である。どのようなリアリズムの作家にも負けぬリアリズムを、私たちは感じとることができるのである。しかし、アナイス・ニンの世界を世界としているのは、上述のような諸点であるよりも、どのように disguise しようとも、必ず作品の中に顔をのぞかせているアナイス・ニン自身なのである。まるであふれ出したように、作品のいたる所にあらわれている、濡れぬれとした、彼女の感覚そのものなのである。それは日記と小説を問わない。かえって小説の中に多く彼女自身が現われているように感じることは、日記の中で自由奔放さが、fictitious であろうとする努力のうちに抑制されるからであろうか。

If the heavy rain caught them in their finest clothes, on the way to a bullfight, Renate laughed as if the gods, Mexican or oth-

ers, were playing pranks. If there were no more hotel rooms, and if by listening to the advice of the barman they ended in a whorehouses, Renate laughed. If they arrived late at night, and there was a sand storm blowing, and no restaurants open, Renate laughed. <sup>(25)</sup>

雨に降られたといっは笑い、泊る宿がないといっは笑うレナーテの笑いは、若い娘の、あの内側から突き上げ、こみ上げる笑いではない。まさしく風鈴の響きのような笑いである。レナーテの笑いは、笑いそのものではない。だから、それは虚ろで物哀しく響くのである。しかし、虚ろで物哀しい笑いの中に、なんと多くのものがこめられていることであろうか。さまざまな想いが、胸のうちで絡まりあい、屈折しあって出てきた、笑い以上のなにかが、あふれんばかりにこめられているのだ。

Renate's father built telescopes and microscopes, so that for a long time Renate did not know the exact size of anything. She had only seen them diminutive or magnified. <sup>(26)</sup>

女性が少女期を脱して、ひとりの女として成長するということは、シャボン玉を一つ一つこわしていくように、己れの抱いていた夢や幻想をこわしていくという一連の作業を意味するのかもしれない。そこで、これまで望遠鏡や顕微鏡をとおして眺めていた物の実際の大きさや、姿を知ったときに、女に残されているのは、レナーテのように笑うことだけなのである。child-bearing のさいのあの大きな骨折りのあとには、甘い涙の一滴さえ残ってはいないのである。しかもなお、無意識のうちにも、己れの幸福を自身に対して暗示しようとする努力は、その笑いに風鈴の響きのような哀しさを与えるのである。現実の世界の中で、夢が一つ一つとこわれてしま

ったとき、アナイス・ニンは、あるいは「女」は、自分で夢を創りださなければならぬ。自分の想念の中から断片を集めて、つなぎ合わせて、万華鏡の模様を創りださなければならぬ。そしてその模様は、どのように変化したとしても、いつも同じ一つのトーンに浸されている。つまり、女の哀しみと孤独というトーンなのである。

#### IV

アナイス・ニンの世界を律しているのは、非常に強くて、きびしい生への志向である。それは、その度合いのはげしさにおいて、ほとんどモラルにまで高められているように思われる。どのような生も、アナイス・ニンにとっては生きるに値いする生なのである。しかも、その生は自分自身の生であると、他人のそれであるとを問わない。彼女の苦闘のすべては、あらゆる生への志向と強く結びついているのである。そして、このはげしい生への志向に思いいたるときに、彼女の哀しみと孤独という一つのトーンにおおわれたアナイス・ニンの世界を、よりよく把握し、理解することができるのではなからうか。つまり、彼女の夢の世界は、決して逃避の世界ではないこと、孤独と哀しみの生と、自分自身の存在との間に、当然、取ることをゆるされた一つの距離であることを理解するのである。

“*The Novel of the Future*”の中で、アナイス・ニンは、彼女の日記とフィクションに関して、次のように述べている。

One thing is very clear — that both diary and fiction tended towards the same goal: intimacy with people, with experience, with life itself.

そして、さらに、

The necessity for fiction was probably born of the problem of taboo on certain relations. It was not only a need of the imagination but an answer.

Not only conventions dictated the secrecy of journals, but personal censorship. Fiction was liberating in that sense.

彼女のこれらの言葉を、Louis D. Rubin Gr. の次のような言葉，“……that task of the novelist remains what it has always been: To depict the way that things are, which is an act of the highest intelligence.”<sup>(27)</sup>に照らしあわせて考えてみるときに、アナイス・ニンの世界、きわめてパーソナルな特殊な世界が、より普遍的な相を帯びて眺められてくるのではなからうか。真実を求めようとするアナイス・ニンの努力は、彼女をその狭い個人的な世界にのみ留めてはおこななかった。個人的な世界に徹しようとする努力は、彼女をより広い、普遍の世界に導いたのであった。

アナイス・ニンは、決してスケールの大きい作家ではないが、その生涯をかけて志向しつづけた一つの方向と、その方向を取るために払った大きな努力ゆえに評価される作家であろうと思われる。

注(1) Nin, Anaïs: “*The Novel of the Future*”, (Collier Books) p.128

(2) Nin, Anaïs: “*Collages*”, (The Swallow Press) p.7

(3) *ibid.* p.7

(4) *ibid.* p.59

(5) *ibid.* p.59

(6) *ibid.* p.119

(7) *ibid.* p.117

(8) *ibid.* p.122

(9) “*The Novel of the Future*”, p.5

(10) *ibid.* p.156

(11) *cf.* 拙稿『アナイス・ニンの日記について』(「北海道武蔵女子短期大学紀要」第四号)

- (12) “*The Diary of Anais Nin*, vol. II” p.270
- (13) *ibid.*
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*
- (16) “*The Diary of Anais Nin*, vol. III” p.14
- (17) *ibid.* p.14

Dorothy Norman は “*the American Quarterly*” の編集者で、Nin の短篇 “*Birth*” とエッセイ “*Woman in Creation*” の発表を引き受けてくれた人である。

さて、Dorothy Norman の言葉が興味深いのは、きわめてアメリカ的な考え方の基礎をなしていると考えられるものがあるからである。20世紀も30年余を過ぎたこの時代、アメリカはまだ、“a healthy country”であったのだろうか。あるいは、それはアメリカ人、あるいはアメリカが抱いていた、そして、現在もなお抱きつづけているようにみえる幻想の一つではないのだろうか。こう考えるとき、この短かい会話には、二人の人物の取り合わせの妙と、その間にくり上げられるドラマの意味の深さを意味するものがありそうである。

- (18) 当時のヨーロッパの不安な状況は、多くの人々の証言するところである。アメリカ人であったアナイスの夫は、次第にフランス在住が困難となり、アメリカに帰国せざるを得なくなった。アナイス自身はしばらくの間、単身パリに留まったのであるが、やがて、1939年の冬にはヨーロッパを去り、長い不自由な旅のあと、ニューヨークに着いたのであった。

- (19) “*The Diary of Anais Nin*, vol. II” p.69
- (20) *ibid.* p.69
- (21) *ibid.* p.69
- (22) “*The Novel of the Future*”, p.156
- (23) Nin, Anais; “*Under a Glass Bell*”, (The Swallow Press), p.96
- (24) *ibid.* p.97
- (25) “*Collages*”, p.12
- (25) *ibid.* p.9
- (27) Rubin Jr., Louis D.: “*The Curious Death of the Novel*,” p.p.22—23